

## 大村はま「国語科単元学習」の倫理的背景

——大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第一段階に向けて(1)——

新妻千紘 埼玉大学大学院 教育学研究科  
戸田 功 埼玉大学教育学部言語文化講座

キーワード：大村はま、マックス・ウェーバー、理念型、カルヴァン派プロテスタント

### 1. はじめに

大村はまを偉大な実践者として讃えた多くの研究者の内の一人に、波多野完治がいる。波多野は大村を天才と認めながらも、教育研究に際してはその天才性を讃えるだけでは不十分であるとして、次のように述べている。

大村さんのやり方はたしかに天才的だが、「しかし」をつけるべきだ、とおもう。半分は天才だが、あとの半分は、工夫と努力であり、この工夫のためには、理論がある。だからこそ、大村さんは高等女学校で成功し、その上に中学校でも成功することができたのである。

わたしは、大村さんのような偉大な教育者の場合、その天才性を讃えることは、比較的容易だとおもう。多くの人のすでにやっていることでもある。大村さんを神格化すればよいのである。しかし、ここからは、日本の学習指導法の進歩はでてこない。

大村さんを一ぺん天才の座からひきおろす。そうして、平凡人として、大村さんがどんな苦心をし、どんな努力をして、今日の至高の実践能力を勝ちえられたかを分析してみる。このことが必要である。この後者ならば、こんにちの科学の水準でも、分析、説明でき、全ての教師の財産になり得る<sup>1)</sup>。

波多野の指摘は、理論に基づいた工夫や誰もが踏襲しえる可能性を持った努力による数々の行為が、大村の天才性を賞揚すること、すなわち第一章において論じた「実践的に評価する態度」の介入によって見過ごされてきたという事実を示唆している。実際、大村と長らく付き合いのあった倉沢栄吉は「現場の実践家としてこれだけの人は、あと一世紀は出てこない<sup>2)</sup>」と述べたという。「一世紀」という言葉に表れたへだたりの大きさは、偉大な教育者としての大村の評価の高さを意味すると同時に、「平凡人」としての大村の姿を捉えることを阻む〈溝〉の深さを意味するものでもあると言える。

本稿では、大村はま本来の姿をありのままに捉えるために、波多野完治の指摘を手掛かりとして、大村について未だ理解の及んでいない未開拓の領域をもたらし様々な〈溝〉の様相を見てみよう。

## 2. 大村はま「国語科単元学習」の理解を阻む〈溝〉

### 2-1 大村独自の言葉によって生まれた〈溝〉

大村が持っている「言葉」に対するこだわりが並々ならぬものであることは、大村を知る人にとっては指摘するまでもない。「ひとつのことばを覚えることは、ひとつの人生を知ることだ<sup>3)</sup>」と主張し、大村はまの著作集『大村はま国語教室』でも語彙指導の重要性を示すかのように、語彙指導を冠する巻があり、他の巻でもそれに触れる多くの言説を見ることができる。しかしながら、かえってそのために、大村の著作や講演における氏の独特な言葉づかいは今まで指摘されたことがなかった。例えば、「子ども一人一人を見る」という言葉づかいに現われた大村の独自性に注目してみたい。著作『教えるということ』の中で、大村は中程度の生徒に合わせて授業を進めればよいという意見に対して、次のように自論を展開している。

そんなことは空論だと思います。教えたことのない人の空論だろうと思います。または、子ども一人一人をみつめて話をしない人の空論だろうと思います。子どもは、常に一人一人を見るべきであって、それ以外は見ることがない、束にして見るべきものではないと思います<sup>4)</sup>。

ここに見られる言葉から、我々は、大村が子ども一人一人の個性や感性、興味や関心における違いを重要視しているように考えがちである。しかし、別の著作において、大村は次のような言葉を述べている。

子どもの興味を大事にするということは、子どもの自然発生的な興味のとをついていくということではないのです。子どもの興味を大事にして、ぜひ、関心や興味を持ってくれないければいけないことに、きっちり向けていかななくてはならない。興味を指導しなければならないのです。興味を持つべきことに興味を持った人間にする、そうしなければならないので、決してただ子どものあとをついていくことではないのです<sup>5)</sup>。

そもそも「興味」とは、一般的には「自然発生的」なものであると考えられる。しかし、ここからは、「子どもの興味を大事にする」ということは、教師が意図した「持つべき」興味に子どもの関心に向けていくことを意味していると読むことができる。一人一人の違いを見出すべきであると主張しながらも、その違いは教師が作り出すべきものであると主張するのは、一見、甚だしく矛盾しているかのように見える。しかし、一人一人に注目し、異なる指導をすることと「興味」を指導することは必ずしも矛盾しない。「一人一人を見る」という表現が子どもの個性の違いに注目することであるという我々の先入見が、大村の言説の理解を阻んでいるというだけなのである<sup>6)</sup>。

ところで、大村における「一人一人を見る」という言葉が何を意味しているのかという問題については、後で改めて検討することにして、ここでは大村の言葉づかいが一種独特なものであり、大村自身の論とは異なる解釈を生みやすいものであるという事実について確認しておくこととしたい。このような誤った解釈は大村を適切に捉えることを阻む〈溝〉を広げるファクターとして作用してきたと考えられる。従って、大村の「言葉」を引用する際には、その都度本来のものと思われる意味と文脈に立ち返り、最も整合性の高い解釈を採っていく必要がある。このように、大村

の理解を阻む〈溝〉として、まずは大村独自の「言葉」に由来するものを見ることが出来る。

## 2-2 大村の子どもの理解のあり方によって生まれた〈溝〉

大村を理解するための〈溝〉は、「言葉」に由来するものがまず認められるのであるが、その「言葉」を注意深く読んで行くと、そこから見えて来る大村の考え方自体も相当独特なものがあり、我々の抱きがちな解釈の枠組みが当てはまらず、理解を阻んでいることが見えて来る。その一つに、大村の子どもの理解のあり方がある。「一人一人を見る」「興味を指導する」といった表現は、子どもに関する大村独自の表現であるが、大村は実際には子どもをどのように理解していたのだろうか。大村の子どもについての発言をここに参照してみよう。

本人は自分のことなどわかっていません。子どもはそんなこと、わからないものなのです。あなたはどんな性質か、自分の長所は？などと聞けば、適当なことはいいますが、長所はこういうところ、短所は何、学科は何が好き、何が不得意というようなことをペラペラと言っているのを聞くと、その浅さが何ともいわれません。自分というものがわかっていないことに気づいてもないのです。まだまだ未熟なのです。それを先生がわかってやる、あなたはこういう人ですと言わないが、その子を的確にとらえて、その子の成長のためにすべきことをするようにしむける。教師の仕事はそういう仕事なのです<sup>7)</sup>。

まず、大村にとっての子どもは、自分自身のことを理解していないということが前提にある<sup>8)</sup>。そして教師の役割としては、「その子を的確にとらえて、その子の成長のためにすべきことをするようにしむける」という形でなされる。そうすると、先ほどの引用「興味を指導しなければならない」「興味を持つべきことに興味を持った人間にする<sup>9)</sup>」といった言葉の意味するところは、大村にとって子どもの興味関心は理解するものではなく、教育によって教師が作り出すものであったと言えるだろう。

このような、大村における、子どもは自分自身を理解していないという独特な考え方も〈溝〉として働いてきたと考えられる。例えば、大村が行った他の教師への授業の講評からは、授業者と大村との間に、子どもの理解のあり方の違いが原因と思われる見解の相違を見ることが出来る。『教室に魅力を<sup>10)</sup>』に収録された全国国語教育研究協議会の講演では、「好きな詩を選ぶ」という授業について、選択が生徒任せであり、指導をしていると言えないと評している。けれども、恐らく授業者は「好きな」詩を選ぶにあたって指導の必要があるとは考えていなかっただろう。また『教えながら教えられながら<sup>11)</sup>』に収録された松本市鎌田中学校での講演では「涙の表情」という単元について、中学1年生には難しすぎると評している。これらは、子どもは自分自身を理解していないという大村の考えに則れば筋の通った講評ではあるが、授業者の意図を理解しての講評であるとは言い難い。

さらに、双方のすれ違いが最も顕著に表れた例としては、複数の著作で語られているものであるが、「学会の、ある地方の例会でのこと<sup>12)</sup>」があげられる。概要を述べると、子どもが作文の書き加えの場所について教師に質問したところ、ベテランである女性教師は「それはね、このいい頭で考えるのよ」と言いながら子どもの頭を撫でたという。この研究授業は大好評であったが、大村だけは書き加える場所をいくつか例示したうえで考えさせるべきであると指摘し、教えない教師の筆頭としてこの女性教師に痛烈な批判を行っている。大村を絶対的な天才ではなく他の教師

と何ら変わらぬ対等な「平凡人」として考えたとき、自分で考えることを子どもに促した女性教師の意図と、子どもは自分を理解していないと考えて指導の必要を主張する大村の意図との間には明らかな齟齬が見られる。授業の当事者ではない大村が、授業者の意図に全く触れずに自らの意図のみを語っているのは、子どもにおける「興味」と同じく、他の教師の意図もまた、理解の対象ではなく大村によってつくられるべき対象であったと言うことなのかもしれない

大村は「天才」と称揚されるが故に、大村がどのように子どもを理解していたかという点についても、他の国語科教師との子どもの理解のあり方の違いについても、今まで指摘されることはなかった。この、大村独特の子どもの理解のあり方も大村はま「国語科単元学習」の理解を阻む〈溝〉の一つとして指摘することができるだろう<sup>13)</sup>。

### 2-3 大村の指導観によって生まれた〈溝〉

大村の子どもへの理解のあり方について見てきたが、次に、大村から学んだ教え子たちが大村をどのように理解していたかという点についても検討してみたい。大村が自分の指導観を語るに当たって、著作や講演で好んで用いた有名な寓話に『仏様の指』がある<sup>14)</sup>。ぬかるみにはまった荷車を懸命に動かそうとする男を傍らで見ていた仏様は、男に気付かれることなく指の一押しで助けてしまう。そして、男は自分の努力によって困難を打開したという喜びとともに荷車を再び引き始めた、という話である。大村は当時成蹊女学校の学長であった奥田正造から直接対面してこの話を教えられ、長い年月の熟考の末、これを一流の教師の技術についての話であると解釈している。すなわち、教師こそ仏様であり、教師の意図も助力も知らぬままに、自分の実力で困難を打開したと子どもに思わせることこそが、大村にとっての一流の教師の在り方なのである。

ここからは、大村の実践には、教え子に対して教師の意図を理解させないという方策があらかじめ仕組まれていると考えることができる。大村からすれば、教え子が教師の意図を理解していないことこそ理想の状態<sup>15)</sup>であり、教師の技術の高さが現れていることにもなる。さらにこの指導観は、子どもは自分自身を理解していないという大村の子どもへの理解のあり方にも符合している。このような指導の構造上、教え子からの大村に対する理解にも、当然深い〈溝〉が横たわっていると見ることができるだろう。従って、大村の教え子の証言を参照する際には、この点をよく考慮しておく必要があるだろう。

さて、本稿では、大村の実践に見られる強固な一貫性を頼りに論を進めていくのであるが、一貫性の強さとは換言すれば、変化や転向が少ないことも意味している。そこからは、大村が師として仰いだという人々との間にも〈溝〉が存在する可能性をみることができる。他者から学ぶということは、多くの場合、自身のあり方に変化を迫られるものであるが、大村はこのような変化をあまり迫られることなく一貫した学び方をしている。大村が師とした人物は芦田恵之助、川島治子、西尾実などがいるが、彼らについては後の章で検討することとして、ここでは大村の指導観に大きな影響を与えたという寓話、「仏様の指」を大村に伝えた奥田正造について取り上げたい。

奥田正造は成蹊女学校で学長を務め、仏教精神に基づく女子教育に専念した人物である。女生徒に対し作法や茶道、掃除を通じた修行を徹底させていた。奥田によれば、そのような勤労教育のねらいは「喜心・老心・大心」の三つであり、中でも重要なのは「大心」であるとして、次のように述べている。

中にも大心が最も大切である。己を捨てて人のために働く。ほめられたい出しやばりたい、

事毎に私が、といひたいのは禁物である。而してこれを修行せむには陰徳を積むことを心掛けしめるが最もよい。即ち人に知られぬ間に便所の掃除をしたり、下駄の鼻緒をたてておいたり、洗濯したり、ほころびを縫つたりすることである。ほめられたり、礼をいはれたりすると帳消しになる。人知らずして慍みずの反対、人に知られぬことを喜ぶ。廊下に墮ちた糸屑はぢきに誰かが拾つてかたづける。いつの間にか黒板がきれいになり、机は正しく並び、室内がきれいになつて居る。誰がしたのかわからぬ。師も弟も弟同志も誰かもその他の人も相顧みてにこやかである<sup>16)</sup>。

ここからもわかるように、奥田が重要視したのは「陰徳」であつた。徳を積むならば、誰であれ誰にも気づかれないことが最も良いという考えは「仏様の指」に通じるものがある。では、大村の重視するものは何であつただろうか。

まず、大村の「教えない教師」に対する批判の言説に顕著に表れているが、大村の場合、常に教師の仕事の成果が強調されている。「誰にも気づかれない」ことこそ良いという奥田の強調は、大村の場合、生徒から見える教師の仕事に対して適用され、教師の仕事の成果を教室以外の場所で公言することについては問題としていない。この点において奥田と大村の思想は相反していると言うことができるだろう。

また、大村の解釈によると、仏様は教師の比喩として解釈され、大村と教え子の間には教師の意図に関わる〈溝〉が横たわっている。しかし奥田の場合、仏様と教師は特に重ねられていない。「師も弟も弟同志も誰かもその他の人も相顧みてにこやかである」との言からわかる通り、陰徳は教師と生徒といった立場にかかわりなく誰もがいき、かつ誰もがそのことを理解しあっているのである。

ところで、ここでは双方の指導観を簡単に比較することに留め、奥田が意図した「仏様の指」の真意についてはこれ以上触れないこととする。けれども、この簡単な比較だけで、双方の指導観がかけ離れていること、そして大村の解釈が奥田の意図したものとは異なっていたらうことは十分に推測できる。そして両者の間に横たわる〈溝〉は、大村が全く無自覚であるが故に相応に根深いものがあつたと言することができるだろう。では、一方の奥田の側に立って、本来「仏様の指」の話をしたことはどのような意図があつたのか、さらに、奥田の意図はどのように達成または失敗したのかという点については、奥田の人物像、思想、教育観に照らしたうえで、改めて論じることとしたい。

以上、「言葉」「子どもの理解のあり方」「指導観」という観点から、大村と氏の理解を試みる人々や他の授業者、教え子、及び、大村が師として学んだ人物の間に横たわる〈溝〉の存在が明らかになった。便宜上、それぞれが別箇のものであるかのように論じたが、それぞれは相互に重なり合い、関連し合うものとして考える必要があるだろう。

本項では、今まで指摘されることのなかつた〈溝〉の存在を十分に考慮したうえで、「天才」であるという前提のもとに理解されてきた大村独特の価値観、教育観等について、「平凡人」すなわち同じ人間として問い直し明らかにしていくことが極めて重要ではあるが、相当に困難な課題であることが以上の考察の結果明らかになった。そこで、次項からはそのような〈溝〉がなぜ、どのように存在することになったのかという観点から、大村の生まれ育った環境に見られる倫理的背景について考察していくこととしたい。

### 3. 大村はま「国語科単元学習」の倫理的背景

#### 3-1 大村はま「国語科単元学習」の理解を阻む最大の〈溝〉

『大村はま自叙伝 学びひたりて<sup>17)</sup>』において、大村は周囲にはっきりと公言しなかったある事実について述べている。それは氏が生涯を通じてキリスト教徒であったことである。氏は自分の信仰について語らなかつた理由を次のように述べている。

実は私は、自分がクリスチャンであるということを、あまり人には言いたくありません。どうしても言わなければならないことがない限り、クリスチャンだと言ったことはありません。なぜかと申しますと、本物のクリスチャンだと思える人にあまり会えないからです。(中略)日本ではキリスト教というと、どれも同じに見られがちですが、戦時中、戦争協力の点では、プロテスタントの中でもクリスチャンの態度は大きく分かれました。私は、同じクリスチャンだからといって、自分とは行いの異なった人たちと同じだとは、思われたくありません。また、こんな言い方はたくさんの信者の方々に対しては申し訳ないことかもしれませんが、世間でクリスチャンといわれる方たちの中には、そのなさることやおっしゃることが、私から見ると、本当のクリスチャンだと思って、慕うことのできる、尊敬できる姿からは遠く、一種独特の甘さを感じられることがあります。私は、そこから来る独りよがりのようなものが、たまたまなくいやなのです<sup>18)</sup>。

前項で、大村はま独自の言葉づかいによって生まれた〈溝〉について指摘したが、この引用もまた意味のわかりづらい表現が多く使われている。「本物の」あるいは「本当の」クリスチャンとはいかなる人物を指すのか、また「戦争協力の点では、プロテスタントの中でもクリスチャンの態度は大きく分かれました」とあるが、どのように分かれたのか不明瞭である。明確なのは、大村が自分こそ「本当」のクリスチャンであるという強い自負とこだわりを持っていたという点である<sup>19)</sup>。また、別のところでは、大村はクリスチャンであると公言したくなかつた理由として、自分がカトリックであると誤解されたくないためであるとも述べているが、ここからは大村が他人からどうみられるかという点を極めて強く気にしていたとともに、言葉のもたらす印象に対する受け身の姿勢を見ることができている。

上記の大村の言葉の引用は「深い根に思いをはせて」と題された序章における語りであるが、「深い根」が意味するものとしては「純粋なクリスチャン」である両親のもとに生まれ育ち、ミッション・スクールである共立女学校、捜真女学校での生活を経て、キリスト教に由来する犠牲と奉仕の精神をモットーとする東京女子大学を卒業した経緯が述べられている。そして戦後、高等女学校の職を捨てて新制中学への異動を決意した理由については、次のような述べ方をしている。

私は中学へ移ろうと決心したとき、自分では、いつも人に話していたとおり、新しい時代の建設のために何かしたかったに違いありません。しかし、そのよって来るところは、遠い遠いところにあり、私という人間の中に、少しずつ少しずつ積み上げられてきたもの、育てられてきたものという気がするのです。突如として戦争責任を感じたり、突然中等教育に携わろうという志を抱いたのではないんだな、と思います。具体的に形に現われたものは突然であっても、

その根はどんなに根強く深く、自分の中にあったものかと思うのです<sup>20)</sup>。

戦争責任を感じた、あるいは、新たな中等教育に携わる志に燃えていたというのは、あくまでも表層的な理由に過ぎず、すべては「深い根」、すなわち自分を取り巻いていた環境と教育によるものであり、なおかつ「深い根」こそが大村のあらゆる行為の文字通り根源的な動機を形成しているという事実を伺うことのできる記述であると言えるだろう<sup>21)</sup>。

新制中学への異動は、かの有名な一人一人に別の課題を与えるという指導の工夫を編み出すきっかけとなった大村の重要な展開点として位置付けられる。このような大村の実践の本質に関わる判断や決定がすべて「本物のクリスチャン」たる行為を基準に行われていたとすれば、我々は最も大きな〈溝〉の存在を見過ごしていたことになる。実際、大村の信仰と実践の関係について指摘した先行研究は未だ存在しない。

大村はいくつかの教会と異なる宗派に属する学校に通った経験があるが、すべてカルヴァン派プロテスタントの教会及び学校であり、中でも信仰について大村への影響が大きかったのは長老制<sup>22)</sup>に則り、改革派に属する横浜海岸教会であったと考えられる<sup>23)</sup>。そこでマックス・ウェーバー著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神<sup>24)</sup>』を主な手がかりとし、ウェーバーが構成したカルヴァン派の信仰とそれが行為にもたらす影響についての理念型を取り上げ、大村の言うところの「本物のクリスチャン」の実態について明らかにしていきたい。

### 3-2 カルヴィニズムにおける神の至上性

カルヴィニズムの行動原理を理解するためには、この信仰の最も特徴的な教義でありプロテスタントにおいて最も心理的影響が強かったとされる、恩恵による選びの教説「予定説」を把握する必要がある。

ウェーバーが予定説の説明として最も権威ある典拠として挙げている「ウェストミンスター信仰告白<sup>25)</sup>」によると、罪の状態へと墮落した人間は自らの意思によっては悔い改めることが完全に出来なくなってしまう。神は自らの栄光を顕すために、神自らの自由な恩恵と愛によって、ある人々を永遠の生命を生きる者として、他の人々を永遠に死滅する者として決定したという。この決定が「予定説」である。この神が定めた予定の絶対的な超越性に関してウェーバーは次のように述べている。

地上の「正義」という尺度をもって神の至高の導きを推し量ろうとすることは無意味であるとともに、神の至上性を侵すことになる。けだし、神が、そして神のみが自由、別言すれば、どんな規範にも服さないのであり、神がわれわれに知らしめることを善しとしたまわらないかぎり、われわれは彼の決意を理解することも、知ることさえもできないのだ。われわれが抛り所としうるのはこうした永遠の真理の諸断片だけで、他の一切——われわれの個人的運命のもつ意味は見るべからざる神秘に蔽われており、それを究めようとするのは不可能でもあるし、身の程を知らぬことでもある。たとえば、神に捨てられた者がその運命の不当を訴えるとしても、それは獣類が人間に生まれなかったのを咄くのと同じだ。けだし、すべての被造物は超ゆべからざる深淵によって神から隔てられており、神のみ前にあつてはただ永遠の死滅に値いするだけなのだ。われわれが知りうるのは、人間の一部が救われ、残余のものは永遠に滅亡の状態に止まるということだけだ。人間の功績あるいは罪過がこの運命の決定にあずかる

と考えるのは、永遠の昔から定まっている神の絶対に自由な決意を人間の干渉によって動かしようとは見なすことで、あり得べからざる思想なのだ<sup>26)</sup>。

ところで、ウェーバーによって「悲愴な非人間性をおびる教説<sup>27)</sup>」と称された予定説であるが、予定説における神と人間の関係は、「仏様の指」における教師と生徒の関係と奇妙な対応をなしている。予定説における神の至上性は、神の決定を人間は決して伺い知ることができず、干渉することも推量することさえも許されないという点に見いだされる。そして「仏様の指」における大村はまの至上性は、子どもが無自覚なままに教師の意図に従わされてしまう教師の技術において見いだされるのである。教師の技術が高ければ高いほど教え子との間の相互理解が阻まれ〈溝〉は深くなり、〈溝〉が深くなればなるほど大村はまの天才性は高められていく。ここには、師弟ともに自らの仕事を誇らず、むしろ誰の手柄であるかわからないことを喜ぶべきとした奥田とは正反対の情景を見ることができるといえる。

大村に「仏様の指」の話をした奥田正造は自他ともに認める熱心な仏教徒であったが、この寓話についての大村はま独特の解釈の裏には、仏教精神よりもむしろカルヴィニズムに見られる神の至上性が反映されていることは十分に推測できるであろう。

### 3-3 救いへの確証

「選びの教説」の心理的影響の強さは、来世への関心を持たない人々にとっては理解しがたいものがある。来世の運命が決定されていて、なおかつ変更も不可能であるならば、現世の行為はなんら意味を持たず、何をしても無駄であるというニヒリズムに到ることも可能だろう。しかし「地上の生活のあらゆる利害関心よりも来世の方が重要であるばかりか、むしろさまざまな点で一層確実とさえ考えられていた時代<sup>28)</sup>」の人々にとっては、まさしく予定説は「悲愴な非人間性をおびる教説」であった。

神の至上性を認めること、それはすなわち「一切の被造物は神から完全に隔絶し無価値である<sup>29)</sup>」ことを意味する。そこで、至上なる神への信頼を侵すとして、呪術的な宗教儀式、洗礼、埋葬に到るまで全ての神に関わる働きかけは廃絶され<sup>30)</sup>、また、人間的な友情や愛情にも一切の信頼を置かないことが説かれるようになったのである<sup>31)</sup>。

このような孤独の内に、はたして自分が神に選ばれているのかという強い緊張と葛藤に襲われ続けることは耐えがたい試練であったはずだが、ウェーバーによると、予定説の発信者であるカルヴァン、あるいは「カルヴァンの立場をあらゆる点で厳密に固守した一派<sup>32)</sup>」である長老派信徒たちの一部は、自らが救われることを全く疑うことがなかった。一方で、そのような確信を当然とするものの出来なかった多くの人々においては、自らが選ばれているに違いないという主観的確信を得ることが宗教的な義務であると解されるようになった<sup>33)</sup>。では、そのような主観的確信はいつたどのようによつて得られたのであろうか。ウェーバーは、後者を代表とする一派である改革派の教説について次のように総括している。

すべて単なる感情や気分はどんなに崇高にみえても欺瞞的なものであり、したがって信仰は、「救いの確かさ」の確実な基礎として役立つには、客観的な働きによつて確証されねばならない。つまり信仰は《fides efficax》《「有効な信仰」でなければならないし、救いへの召命は《effectual calling》《「有効な召命」——サヴォイ宣言の表現——でなければならない。

もし進んで改革派の信徒に、それではどのような成果によって真の信仰を確実に識別できるのかと問うなら、その答えはこうだろう。それは神の栄光を増すために役立つようなキリスト者の生きざまだ、と<sup>34)</sup>。

では、「客観的な働き」によって確証されうる「神の栄光を増すために役立つようなキリスト者の生きざま」とは、どのようなものであろうか。それは「現世で人々全体の生活のために役立つとする職業労働<sup>35)</sup>」に没頭することである。そうすることによって彼らの考える真のキリスト者の生きざまは実現された、というのがウェーバーの出した結論である。

さて、大村にとって「救いへの確証」を得ることがどの程度切実なものであったかは氏の著作からうかがい知ることはできない。しかしカルヴィニズムの行動原理と同じ傾向性をもった発言は随所に見ることができる。

まず思いつくのが、『教えるということ』に収録され、多くの人々に衝撃を与えた『子ども好き』だけではダメ」という主張である。子どもがかわいいと思えることを教師の仕事において「とてもマイナス面が多い<sup>36)</sup>」と考える、その捉え方は意外性に富んだ大村はま独自の見方ではある。その点をカルヴィニズムに見られる感覚的・感情的な要素に対する嫌悪と符合するものであるとは考えられないだろうか。

また本節冒頭での『学びひたりて』における引用部の、大村が「本物のクリスチャン」でない人々について呈している「一種独特な甘さ」「独りよがり」といった表現も、ウェーバーの総括における「欺瞞的な」「単なる感情や気分」に相当すると思われる。

さらに、感情や気分によってではなく、客観的な確たる証拠を求めるカルヴィニズムの倫理が大村はまの発言に最も顕著に表れているのが、第一節に紹介した「学会の、ある地方の例会でのこと<sup>37)</sup>」である。「それはね、このいい頭で考えるのよ」と言いながら子どもの頭を撫でた女性教師の行為<sup>38)</sup>は、子どもに対する愛情あふれるものに見える。しかし、カルヴィニズムの倫理の上では、愛情はむしろ排除すべきものであり<sup>39)</sup>、その行為は「教えた」という客観的証拠が何ら残らない無意味で空しいものでしかない。実際、大村は「先生は何にも教えていないということにお気づきでしょうか。教師としてゼロだということ。」「私は残念です。そういうふうな授業にならない、何も教えない、呑気な、教師のやっていることとは思えない、すぎ間だらけの授業だったからです<sup>40)</sup>。」といった手厳しいコメントを残している。

もちろん第一節で触れたとおり、ベテランである女性教師の行為が「ゼロ」であるとは必ずしも言えず、その授業を見学した大村以外の教師たちは、むしろその授業及びその場面を高く評価していた。また、「客観的」に考えても、「何も教えていない」ことを証明することの方がはるかに困難であり、そのような断定を認めるためには「教育において客観的（と認定された）事実以外は、一切存在を認めてはいけない」という前提を共有することが必要となる<sup>41)</sup>。

この事例は、客観的証拠の残る指導こそ「本物」であるという大村の倫理観を示すとともに、カルヴィニズムの倫理との高い類似性が認められるものとして考えることができるだろう。

### 3-4 天職観念

ウェーバーによると、職業労働が「救いへの確証」（厳密には救いへの確信）を得るための手段として優れているとされたのには、大きく二つの理由がある。一つは職業労働によって実現する社会的秩序は、「人類の『実益』に役立つようにでき上がっている<sup>42)</sup>」とともに、「社会的な実益に

役立つ行為こそ神の栄光を増し、聖意に適うもの<sup>43)</sup>」にもなると考えられたためである。そしてもう一つは、人々を職業労働に没頭させることこそ、組織的に人々を禁欲的生活に導くうえで最適な手段だったためである<sup>44)</sup>。

たとえば、ウェーバーは「カルヴァン派プロテスタンティズムの禁欲とカトリックの修道院生活の合理的形態とに共通してみられるあの倫理的生活態度の組織化は、純粹に外面的なことがらについてみても、『厳格な』ピューリタン信徒がたえず恩恵の地位にあるか否かみずからを審査した方式のうちに、明瞭に表れている。」と述べて次のような例を紹介している。

罪と誘惑、そして恩恵による進歩のあとを継続的にあるいはまた表にして記入する信仰日記は、イエズス会派によって始められた近代カトリックの敬虔感情（とくにフランスの）にも、また改革派教会のもっとも熱心な信徒のそれにも共通してみられるものだった。（中略）改革派のキリスト者たちはそれを用いて、自分で「自分の脈搏をみた」のだった。著名な道德神学者たちについてはすべてそうした事実が伝えられているが、ベンジャミン・フランクリンが自分の一つ一つの徳性における進歩について統計的な表示の形でおこなった記帳も、その古典的事例の一つとなるだろう。他面において、中世も古くから（すでに古代にも）見られた神の記帳という考え方は、バニヤンではいちじるしく強められて、罪人と神の関係が顧客と店主の関係にたとえられるという、あの特徴的な殺風景さにまでなっている。つまり、いったん借勘定となった者は、自分の全功績による収入をもってしても増え続ける利子を支払うだけで、元金はどうしても返済できないというのだ。（中略）こうして生活の聖化は、ほとんど事業経営という性格をさえもつものとなりえた<sup>45)</sup>。

「神の栄光を増す」という救いへの確証を得るための究極の目的は、神秘主義的な感覚や感情を廃絶したうえで、客観的確認を必要とするという前提のために、このような「功利主義的性格<sup>46)</sup>」を帯びるようになった。一方で、「すべてのキリスト者<sup>47)</sup>」の生活全体を「能動的な」「自己統御<sup>48)</sup>」のもとに置くことに成功したのである。

最も厳格で禁欲的なカルヴァン派教徒<sup>49)</sup>は、「神の栄光を増すために役立つのは、怠惰や享樂ではなくて、行為だけだ。」として、時間の浪費を「第一の、原理的にもっとも重い罪」として位置付けた<sup>50)</sup>。働かなくても食べていけるだけの富の蓄積があったとしても、「その所有のうえに休息すること<sup>51)</sup>」は道德上許されず、あらゆる怠惰や享樂は、輕蔑と排除の対象とされた。ちなみに、怠惰や享樂の対象としては、多すぎる睡眠、衣服・食事の上での贅沢、無駄話、無益な交友、学問以外の文学、芸術、など、職業労働における勤勉性を損なうと考えられるあらゆるものが対象となった<sup>52)</sup>。

ルター派において、天職観念とは「個々人が神のあたえ給うた地位と限界のうちに固く止まること<sup>53)</sup>」を意味する。一方で、カルヴァン派においては、職業の変更及び兼業は必ずしも排斥されず<sup>54)</sup>、「神に一層よるこばれるような天職<sup>55)</sup>」としては「自分が恩恵の地位にあることを確認せねばならない<sup>56)</sup>」という方法意識によって、「収益性」の高さが最も重要なものとして理解されるに至った<sup>57)</sup>。

大村においても、カルヴィニズムと合致するような、勤勉で禁欲的な生活はよく知られている。『学びひたりて』によると、幼少期からすでに記録をつける習慣が身に着いており、食べたものをノートに書きつけるよう母に言われていた、あるいは、妹の言った言葉を書きとめたノートが何冊もあっ

た、といった記述がある<sup>58)</sup>。また、睡眠時間についても東京女子大学の担任の指導があつてから徐々に減らす試みをしており、最も忙しい時期には3時間程度しか取らなかったという<sup>59)</sup>。さらに「研究」し続けることこそ教師の資格であると考え、「忙しいから研究する暇がない」という意見については口実にすぎないと述べている<sup>60)</sup>が、ウェーバーがカルヴァン派の代表的信徒として挙げたバックスターも全く同じ趣旨の発言——「聖なる義務のための時間がないなどと言うのは、自分の職業を怠けている人々です」——を残している<sup>61)</sup>。他にも、若い時分から地味な装いをしていたという事実<sup>62)</sup>、職員室での他教員との関わりが少なく、空いている時間があれば授業準備に充てていたという発言<sup>63)</sup>、あるいは、SF小説や漫画に対して子ども達と同じような楽しみを見いだせなかったという記述<sup>64)</sup>、さらに、学生時代は国文学よりもむしろ理系科目に嗜んでおり、東京女子大に通っていたころは数学や地理を好んでいた<sup>65)</sup>、また、公立女学校に過ごした一時期は理科教師を志していた<sup>66)</sup>という記述などがあり、大村の禁欲の傾向性はカルヴィニズムと非常に似通ったものであると言える。

#### 4. 大村はま及びカルヴァン派プロテスタントの同型性

さて、これまで大村の言うところの「本物のクリスチャン」の実体を明らかにするために、ウェーバーの提示したカルヴァン派信徒の理念型を参照し、カルヴィニズムの行動原理を詳細に追ってきた。指摘したいいくつかの点において大村とカルヴィニズムの行動原理には高い共通性が見られるが、厳密には両者が同じものであると結論付けることはできない。理由としては、西洋と日本におけるカルヴィニズムの信仰の性質の違いをここでは十分に論じられないという点、大村における信仰の解釈がどのようなものであるかに未だ触れていないという点が指摘できるのだが、それ以上に重要な点として注目しておかなければならない事実がある。大村の行動を規定している「深い根」の形成が、大村によって自覚的に為されたものではないということだ。大村は、自分の信仰について次のように述べている。

私は、ただそういう両親のもとに生まれたというだけで、自分から何も選び取ったのではないということ、私がどういふものを両親から得たとしても、それはただ、そういう巡り合わせであったにすぎないのだと思うのです<sup>67)</sup>。

自らが「本物のクリスチャン」であるという強い自負とこだわりを維持しながら、それが自ら選びとったものではないという矛盾とも思える発言はいったい何を意味しているのだろうか。大村の倫理観は、無自覚でありながら<sup>68)</sup>、いや、むしろそれ故に、氏の人生の極めて重要な判断に直接的に介入し、生活を広範囲にわたって規定している。そして無自覚であるからこそ、〈溝〉として誰からも（恐らくは本人からも）明確に認識されることがなかった。この事実が示すのは、大村の実践どころか、大村の人生全体を規定したであろうカルヴィニズムにおける倫理的背景の根強さ、強烈さであると言えよう。その強烈さ故に、大村の倫理観はカルヴィニズムと高い同型性を持つにいたったと考えることができる。

本稿では、大村の言う「本物のクリスチャン」の実体をウェーバーの構築した理念型から推察するというアプローチを取った。よって、次稿では著作においても大村が多用する「本物」という言葉の意味を、大村の発言からより精細に捉えていくこととしたい。

## 注

- 1) 大村はま、『授業を創る』、国土社、2005年、p 172
- 2) 『大村はま国語教室 月報15 第8巻』、1984年、「大村先生との距離」青木幹男 p 2 参照
- 3) 大村はま、『日本の教師に伝えたいこと』、ちくま学芸文庫、p 167
- 4) 大村はま、『教えるということ』、共文社、1973年、p 54
- 5) 大村はま、『大村はま・教室で学ぶ』、小学館、1990年、p 182
- 6) ちなみに、前者は1970年8月の講演記録からの引用、後者は大村が退職したのちに雑誌『総合教育技術』に掲載されたもので、1984年以降に書かれている。前後の引用は時系列順である。よって大村の教育観が変化したことで矛盾が生じたとは考えにくい。大村の実践の一貫性の強さを鑑みても、前後は矛盾しないものと考えらるべきである。
- 7) 前掲書5 p 184
- 8) 注1 p 30 「子どもの興味を調べるアンケートは役立たない」も参照のこと。「だいたいの子どもは、自分が面白いと思ったか、面白くないと思ったか、よくわかりません。」とある。
- 9) 前掲書3 p 182
- 10) 大村はま、『教室に魅力を』、国土社、1998年、p 72-185参照
- 11) 『信州における大村はま講演集 教えながら教えられながら』、長野県国語教育学会編、1986年、p 5-28参照
- 12) 大村はま、『日本の教師に伝えたいこと』、ちくま学芸文庫、2006年、p 30-32
- 13) 1993年秋田県の本庄市教育講座での話題であるが、2002年鳴門教育大学での講演で再度同じ話をしている。『教えることの復権』（大村はま／荻谷剛彦・夏子、ちくま新書、2003年、p 120-121）『評伝 大村はま』（荻谷夏子、小学館、2010年、p 521）にも取り上げられており、大村の子どもに対する理解のあり方や指導観を捉えるうえで重要なエピソードであると考えられる。
- 14) 前掲書4 p 129-133参照
- 15) 大村はま、『ことばを豊かに 大村はまの国語教室』、小学館、1981年、p 218  
「近年は意識してなんとか命令を発せず、そのことを自然にやらせようということではいっぱいでした。人様からいいふうだとおっしゃっていただくようなことは、ほとんどそれだったと思います。そのことが子どもに、自然にされてしまう。そして、命令したり、叱ったりしないで、いつの間にか、先生のおかげで、しなければいけないことをやってしまっていたという一理想を言えば、それを理想にしていました。」とある。
- 16) 奥田正造、『奥田正造全集 上巻』、奥田正造全集刊行会、1959年、p 204
- 17) 大村はま、『大村はま自叙伝 学びひたりて』、共文社、2005年
- 18) 同 p 17-18
- 19) 大村の宗教に対する自負とこだわりが強固であったことがわかる次のようなエピソードが『評伝 大村はま』（前掲書13）に示されている。  
「柔らかに人に寄り添うはまも、やはり大事なところは譲れないのは、相変わらずである。  
ある日曜日に、三人の生徒たちがはまの下宿を訪ねてきた。はまは、いそいで昼ご飯を用意してもてなし、学校とはまた違う親密な半日があっという間に過ぎた。三人ははまのもてなしに感激し、何か贈り物がしたくなった。先生がうんと喜んでくださる物がいい、何がいいだろう……三人はあれかこれかと、さんざん知恵を絞ったが、ふと、先生はクリスチャンであるそうだから、と思いついて、諏訪の町の書店でマリア像の壁掛けを買い求めた。きれいに包んでもらって、先生はどんな顔をなさるだろうか、とどきどきしながら、次の日曜にはまを訪ねた。  
はまは、三人の娘がいかにも嬉しそうに差し出した贈り物を、同じように嬉しそうに受け取って、いそいそと包みをほどいていったが、マリア像が出てきたとたんに、さっと顔色を変えた。はまは厳格なプロテスタントである。はまにとっての信仰は偶像ともっとも離れたところにある。こんなことをしてはいけない、と固い声で叱って、最後までそれを受け取らなかった。三人は、この急な怒りのわ

けがまったくわからず、途方に暮れて、来た時と別人のような顔をしてとぼとぼと家に帰っていった。美しい偶像に彩られたカソリック教会のイメージが、生徒たちにはあった。それと、はまのプロテスタントの信仰とが、異なる立場であることを、はまは、三人にちゃんと話してやればよかったのかもしれない。けれども、信仰が深いものであるだけに、その話題は、突然のマリア像に動揺した直後のはまにとっては、容易に語れるものではなかった。マリア様の壁掛けを、可愛い生徒の可愛い贈り物として笑顔で受け取っておく、という器用なことができないあたりが、やはり、はまだった。」(p 217-218)

日曜日の昼間に昼食を振る舞うといったかなり手厚いもてなしをするまでに生徒を大切にしていたのにもかかわらず、善意からの贈り物を冷たくはねのけ、その贈り物が受容できない理由すら説明しないという有り様に、排他的なまでに大村の信仰における規範意識が強烈であったことが伺われる。

20) 同 p 22

21) 『教えるということ』(前掲書4)には、「戦争責任にいたたまれないような気持ちで飛び込んだ中学校ですから、どんな苦しみがあってもかまわないと思っていました。」(p 59)とあるが、それ以降に執筆された『大村はま自叙伝 学びひたりて』(前掲書17)では「いきなりそういう気持ちになったわけではないのです。私は、この道を自分から選んだことにそのよって来た、遠いところを、しみじみと考えるときがあります。」(p 12)と述べて、自身を取り巻いてきた教育と環境がすべてに強く根ざしていると結論付けている。

22) 長老制とは、カルヴァン主義的教会制度を意味する。『バクスターとピューリタニズム 一七世紀イングランドの社会と思想』(今関恒夫、ミネルヴァ書房、2006年、p 11-13)には、次のように解説されている。

「はたして、カルヴァン自身がいわゆる長老制度を、細部にいたるまで、それぞれの教会におかれた状況と無関係に厳守すべきだと考えていたかどうか、「改革教会」が各地に広がるにつれて、同じ長老制といっても、それぞれの地域の政治状況・教会情勢の違いに応じて実情はまちまちではなかったか、といった点をふくめて問題は簡単ではない。しかし、次のような点は形式的共通項としてくることができらるだろう。

(a) 教会統治は、牧師と個別教会が選出した信徒長老(あるいは治会長老)がつかさどる。その他に、博士、教師がおかれる場合があり、聖書や郷里の研究・教育にあたる。さらに、福祉的役割をはたす執事職がおかれる。

(b) 教職者と信徒長老は、教会統治と「教会裁判所」の機能をはたす階層的な会議体を構成する。個別教会のレヴェルでは、教職者と長老は「コンシストリ」(consistory; session)を構成し、さらに個別教会から選出された代表による「クラス」(classis, presbytery; colloquy)と呼ばれる地域的な会議体をつくる。そのうえに地方および全国の「シノッド」(regional synod および national synod あるいは general assembly)がおかれる。そこで重要なのは、最終的決定権は個別教会の「会衆」(congregation)にではなく「コンシストリ」にあり、「コンシストリ」で解決がつかない場合には「クラス」にある、という点である(階層制的代議制)。「クラス」の決定は個別教会に対して「聖定」(decree)としての拘束力をもった。

(c) 個別教会に属する一般信徒は牧会(「魂への配慮」)の対象であり、「教会」のなかで教理的制度的に明確に位置づけられてはいないように思われる。

(d) 最後に、これは長老制独自の特徴ではないが、トレルチ=ヴェーバーによる「教会層」の制度であることを注意しておく必要がある。すべての教区住民を教会は牧会の対象とする。」

23) 『評伝 大村はま』(前掲書13)によると、大村の両親が洗礼を受けたのはメソジスト派に属する札幌教会であるが、横浜に転居してからは長老制、改革主義をとる横浜海岸教会に通っていたとある。幼少期に札幌と横浜を行き来する生活を送っていた大村は両方の教会に通っていたと推察される。メソジスト派、改革派は双方共にカルヴァンが提唱した予定説を信奉する教派であるが、改革派のほうがよりカルヴァンの信仰に近く「本物」に近いと考えられる。また大村が洗礼派をとる捜真女学校に通っていた際、自分は長老教会ですでに洗礼を受けた身であるから新たに洗礼を受ける友人を見てうらやましく思ったとの記述があるが、横浜海岸教会を指していると思われる。

- 24) Max Weber : DIE PROTESTANTISCHE ETHIK UND DER > GEIST 《DESKAPITALISMUS, 1920  
邦訳書：大塚久雄訳、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波書店、1991年
- 25) 同 p 146-147
- 26) 同 p 153
- 27) 同 p 156
- 28) 同 p 172
- 29) 同 p 157
- 30) 同  
「真のピューリタンは埋葬にさいしても一切の宗教的儀式を排し、歌も音楽もなしに近親者を葬ったが、これは心にかなる》superstition 《「迷信」をも、つまり呪術的聖礼典的なものが何らかの救いをもたらしようというような信頼の心を、生ぜせしめないためだった。神が拒否しようと定めたもうた者に神の恩恵を与えようような呪術的な方法など存在しないばかりか、およそどんな方法も存在しない。」ちなみにピューリタンもカルヴァン派プロテスタントの一派である。ウェーバーはしばしばピューリタンを色濃くカルヴィニズムに染まった一派として理念型構成に当たって参照しているため、改革主義の教会に属した大村を理解する上でも同じように参照することとする。
- 31) 同 p 158-159  
「この内面的孤立化は、今日でもなおピューリタニズムの歴史をもつ諸国民の「国民性」と制度の中に生きているあの現実的で悲観的な色彩をおびた個人主義—これは後世「啓蒙思想」が人間を眺めた視覚とは著しい対象をなしている—の一つの根基をも形づくっている。(中略)たとえば、とくにイギリスのピューリタニズムの諸著書がしばしば、人間の援助や人間の友情に一切信頼をおかないよう訓戒している顕著な事実にしてもそうだ。穏健なバックスター (Baxter) でさえ、もっとも近い友人に対しても深い不信感をもつことをすすめ、ベイリー (Bailey) はあからさまに、誰も信頼せず、迷惑のかかるようなことは誰にも言わないのがよい、神だけが信頼しうるかただ、と説いている。(中略)この特有な雰囲気をもたらす独自の影響を感得しようとするなら、ピューリタンの文献のうちでももっとも広く読まれたバニヤン (Bunyan) の『天路歷程』Pilgrim's Progress 《のなかで、「クリスチャン」が「滅亡の町」に住んでいることに気づき、一刻も躊躇せず天国への巡礼に旅立たねばならぬとの召命を聞いてからあとの態度の描写を見るべきである。妻子は彼にとり縋ろうとする。—が、彼は指で耳をふさぎ、「生命を、永遠の生命を！」と叫びながら野原を駆け去っていく。」
- 32) 同 p 216
- 33) 同 p 178  
「恩恵による選びの解釈を変更し、穏健化し、結局はそれを放棄するというのでない限り、とくに牧会上の、相互に関連しあう二つのタイプの勧告が特徴的なものとして現れてきた。その一つは、誰もが自分は選ばれているのだとあくまでも考えて、すべての疑惑を悪魔の誘惑として斥ける、そうしたことを無条件に義務づけることだった。自己確信のないことは信仰の不足の結果であり、したがって恩恵の働きの不足に由来すると見られるからだ。このように、己の召命に「堅く立て」との使徒の勧めが、ここでは、日ごとの闘いによって自己の選びと主観的確信を獲得する義務の意味に解されている。(以下略)」
- 34) 同 p 184
- 35) 同 p 166
- 36) 前掲書4 p 76
- 37) 前掲書3 p 30-32
- 38) 同 厳密には、「教師はその子のそばにいて、『それはね、このいい頭で考えるのよ』
- 39) と言いながら、男の子の頭をクリクリと撫でて、チョンと軽く、指先でたたきました。その仕草がユーモラスで、あどけない感じで、子どもは亀の子のように、つつつと首を縮めてニッコリしました。いかにもうれしそうに、教師の顔を見ました。どこへ入れるかの答えはなくても、十分納得し満足した顔でした。」とある。

カルヴィニズムに見られる愛情への蔑視、あるいは排除の傾向については、前掲書22、p 302、325を参照のこと。

「キリスト教婚姻の最高形態は処女性を失わないもので、それに次ぐのが性的交渉がもたらす子供の出産のために役立つもの、順々にそのようにして、単に愛欲的な、あるいは単に外的な理由によって結ばれ、倫理的にみれば畜妾にひとしいものにまで行きつくことになる。そのばあい、そうした低い段階のなかでは、単に外面的な理由によって結ばれた婚姻の方が（ともかく合理的な考慮から出ているために）愛欲によるものよりもいっそう好ましいのだ。」（p 302）とある。あるいは、「律法では義務とされていないにもかかわらず、何かの善い行為を義務としておこなうのは、いっそう善いことであり、神からいっそう多くの報償をうける、——換言すれば、愛なき義務の遂行は感情的な博愛よりも倫理的に高い」（p 325）とある。後者の例は、タルムード的ユダヤ教に見られる道徳的特徴であるが、ウェーバーは「ピューリタニズムの倫理は、本質上この教義を受け入れたのではないかと思われる。（ここでは論及しえないけれども、彼の（筆者注：カントを指す）定式化された表現の多くは禁欲的プロテスタンティズムの思想に直接つながるからだ）」と述べている

- 40) 大村はま、『教師 大村はま96歳の仕事』、小学館、2003年、p 13-14、16
- 41) 近年の教育行政においては、この前提の基に改革を行う傾向が見られるが、この問題についてはまた別に論じる必要があるだろう。
- 42) 前掲書23 p 166-167
- 43) 同 p 167
- 44) 同 p 196-197  
「カルヴィニズムの神がその信徒に求めたものは、個々の「善き業」ではなくて、組織（System）にまで高められた行為主義（Werkheiligkeit）だった。カトリック信徒たちの罪、懺悔、赦免、そして新たな罪、それらのあいだを往来するまことに人間的な動揺や、また、地上の罰によって償い、聖礼典（秘蹟）という教会の恩恵賦与の手段によって全生涯の帳尻が決済されるというようなことは、カルヴァン派信徒のばあいには全く問題にならなかった。こうして人々の日常的な倫理実践から無計画性と無組織性がとりのぞかれ、生活態度の全体にわたって、一貫した方法が形づくられることになった。（中略）けだし、あらゆる時とあらゆる行為にわたって生活全体の意味を根本的に変革することによってのみ、自然の地位（status naturae）から恩恵の地位（status gratiae）へと人間を解放する恩恵の働きを確認しうるとされたからだ。「聖徒」たちの生活はひたすら救いの至福という超越的な目標に向けられた。が、また、まさしくそのために現世の生活は、地上で神の栄光を増し加えるという観点によってもっぱら支配され、徹底的に合理化されることになった。—しかも、》omnia in majorem dei gloriam 《「すべてを神の栄光の増さんのために」との立場を、彼らほど真剣に考えたものはかつてなかった。ところで、自然の地位を打ち超えると考えられるものは、不断の反省によって導かれる生活以外にはない。」
- 45) 同 p 213-214
- 46) 同 p 167
- 47) 同 p 207  
「すでにゼバスティアン・フランク（Sebastian Franck）は宗教改革の意義を明らかにしようとして、いまやすべてのキリスト者は生涯を通じて修道士とならねばならなくなった、としているが、これはこうした宗教意識の性質の説明としてまことに核心を衝いたものだ。」とある。
- 8) 同 p 201
- 49) カルヴァン派から発生したイギリスのピューリタン信徒、リチャード・バックスター（Richard Baxter）を指す。ウェーバーが「禁欲的プロテスタンティズムを一つの総体として取り扱う」ために、「天職理念のもっとも首尾一貫した基礎づけ」を示した代表的信徒として、考察の中心においた人物である。p 289-290参照。
- 50) 同 p 293  
「人生の時間は、自分の召命を「確実にする」ためには、限りなく短くかつ貴重だ。時間の損失は、交

際や「無益なおしゃべり」や贅沢によるものだけではなく、健康に必要な一六時間かせいぜい八時間以上の一睡眠によるものでも、道徳上絶対に排斥しなければならない。」

51) 同 p 299

52) 同 p 297

「(11) Baxter, op. cit., p.79. 「つねに時間を大切にし、毎日自分の時間をなくさぬようにもっと注意すれば、あなた方は自分の金銀をなくさぬようになるでしょう。無駄な気晴らしや衣服、御馳走、無駄話、無益な交友、それに睡眠などのどれかがあなた方に誘惑となって時間を奪いそうになったら、よくよく注意しなさい。」

あるいは同書 p 331-332を参照

「ピュウリタンは劇場を排斥したし、また、愛欲的なものや裸体などをあらゆるところから一切閉め出してしまったが、こうなると、文学においても芸術においても過激な主張は止まるところを知らなかった。芸術的題材の使用にことごとく反対し、無味乾燥な合目的性を断固として庇護するために、》idle talk 《「無駄話し」、》 superfluities 《「余計なこと」、》 vain ostentation 《「虚しい見栄」といった概念—どれも非合理的で目標のない、したがって禁欲的でなく、そのうえ神の栄光よりは人間に奉仕する態度を表現するありとあらゆる言葉—がたちどころに用意された。それがとくに著しかったのは身につける装飾品、たとえば服装に関するばあいだった。」

53) 同 p 307

54) 同 p 309

「いくつもの職業を兼ね営んでもよいかとの問いには—それが公共の福祉ないし自分自身の福祉に役立ち、他の誰をも害せず、兼営する職業のどれにも不誠実 (《unfaithful》) にならないかぎり、無条件に肯定的な答えがあたえられた。そればかりではなく、職業の変更さえも決してそれ自身排斥すべきものとは考えられていなかった。」

55) 同

56) 同

57) 同 p 310

「何よりも重要なのは、職業の有益さの程度を、つまり神によるこぼれる程度を決定するものが、もちろん第一には道徳的規準、つぎには、生産する財の「全体」に対する重要度という規準で、すぐに、第三の観点として私経済的「収益性」がつづき、しかも実践的にはこれがもちろんいちばん重要なものだった」

58) 前掲書1 p 72、p 162

59) 前掲書13『評伝 大村はま』、p 148-149

60) 前掲書4 p 27-32

ちなみに大村における「研究」という言葉が何を意味するものであるか、と言う点については稿を改めて詳細に論じることとしたい。

61) 前掲書23 p 299

「(14) Baxter, op. cit., p.242. 『聖なる義務のための時間がないなどと言うのは、自分の職業を怠けている人々です』。」とある。

62) 前掲書13『評伝 大村はま』 p 227

「質実剛健を目指す学校で、地味な木綿を着ている生徒たちと同様に、自分をこれ以上ないくらいに地味に装った。学校という場で、着ている着物のことなどで、生徒の気持ちが揺らぐのを、はまは嫌ったのだった。」とある。

63) 『ちくま NO.141』、編集者：柏原成光、筑摩書房、1982年、p 6

「短い時間を利用して仕事を進めるには部屋から出ていく暇はなかったんです。一秒に一枚ずつ刷れる印刷機ですから、休み時間五分でもずいぶん刷れますでしょう。それを使えばぐんぐん仕事が進むわけですね。放課後なんかは、くたびれてしまって暫く誰にも会わずにへばっていないと回復できないんです。お掃除をして、皆静かになって学活になってしまいますね。そうするとがっかりしてしまっ

て、暫くほんとうに立てないんですね。誰も居ない所でどんな顔でもして直さないと直らない。皆が図書館に来る頃にはまた戻っているのですけれども、あの間……授業が終わって学活がある二、三十分というのは私の死にそんな時間で、くたびれてもうどうにもならなかったんです。

その時間に職員室に行って同僚とだべっていれば、もっと皆さんと楽しい生活ができたかもしれないと思うのですけれども、そういうことができなかつたのは週二十七時間授業をもたせるという意地悪のためですね。」とある。

64) 前掲書5、p 60-69参照

65) 前掲書17、p 238-239

66) 同書、p 178

67) 同書 p 16

68) 自ら選んでいないという発言に加えて、「人が育ってくること、その人の道が選ばれるということは、自分でも気がつかないほど遠くの方にその元があるような、その不思議さに自分でも驚くような気持ちで、振り返ってみるのです。」(前掲書1、p 12)の記述がある。ここから、大村は無自覚であることについて、自覚的であることよりも良いと考えていたと推測することができるかもしれない。ちなみに、これらは大村が退職した後の述懐である。

(2019年3月25日提出)

(2019年4月19日受理)